



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2642 号 2015.9.21 発行

時代に挑む 50周年を迎える太陽の家

大分合同新聞 2015年9月21日



義肢装具科の作業の様子=1968年(社会福祉法人太陽の家提供)

「保護より機会を」一故・中村裕博士の提唱により産声を上げた別府市亀川地区の「太陽の家」が10月5日、創立50周年を迎える。障害者の就労など困難だと思われていた時代に、働く場所を提供し、共生への道を切り開いてきた。半世紀がたとうとする今、バリアフリーは国民生活に浸透し、障害者を取り巻く環境は大きく変わった。関係

者は「太陽の家の存在抜きでは考えられない」と口をそろえる。太陽の家が果たしてきた役割や障害者の社会参加、これからの支援の在り方を取材した。

「太陽の家なら仕事があるぞ」。教官のこのひと言が広島市出身の田部辰朗さん(64)の人生を大きく変えた。職業訓練所に通っていた16歳の時だ。1歳でポリオ(小児まひ)を発症し、下半身に障害があった。障害者は病院か施設、家にいるしかないと思っていた。「自立したい。自分の居場所が見つかるかも」。迷わず門をたたいた。

太陽の家は整形外科医だった中村博士が全国に先駆け設立した身体障害者が働く工場だ。田部さんが入所した当初、開所から1年半が過ぎていた。レンコン畑に囲まれたかまぼこ形の建物などでは、自分と同じ約100人の障害者が竹細工や義肢装具などを作っていた。

「みんな車いすに乗って元気に動き回っていた。こんな世界があるのかと衝撃を受けました」

先輩たちに学びながら仕事を覚えた。パイプ椅子ややぐらごたつの製造などに携わり、汗まみれで働いた。中村博士は頻繁に作業場を訪れ、「障害者だって自立できる」「納税者になれ」と熱っぽく語っていた。

「ここに来るまで、自分に何らかの可能性があるとは思ってもいなかった。社員になり、収入は上がり、車やマイホームを持てた。定時制高校にも通えた。夢がすべてかないました」

田部さんは定年まで太陽の家で働いた。退職後は点字ボランティアを始めるなど、充実した日々を送っている。毎月、別府市内の自宅に届く太陽の家の広報紙「太陽通信」を眺めながら、つぶやいた。

「今の自分があるのは太陽の家のおかげ。太陽の家に育てられたようなもんですよ」

中村博士をそばで支え続けた夫人の廣子さん(76)は「主人は毎日、口に出すのは太陽の家のことばかり。恋人のようでした。一緒にいるのが少なく、とにかく忙しい人だった。障害者を世に出したいと必死でした」と振り返った。

中村裕博士 1927年、別府市生まれ。九州大学医学専門部卒。国立別府病院(現国立病院機構別府医療センター)に勤務していた時に太陽の家を創設した。障害者スポーツの振興に尽力し、64年の東京パラリンピックでは選手団長を務めた。大分国際車いすマラソンの生みの親でもある。吉川英治文化賞や大分合同新聞文化賞など数々の賞を受賞。肝臓を患い、84年に死去。享年57。

自己表現力磨き働く力に 芸術テーマ作業所開設 西宮 神戸新聞 2015年9月21日
障害者の就労を支援する作業所「ひだまりサロン」が、兵庫県西宮市山口町名来1にオープンした。27日には同施設でオープン記念コンサートが開かれる。

コンサートの企画運営などを手掛ける会社「A i n g」が設立。創作活動や音楽演奏会、コンサートなど、「芸術文化」に触れることで自己表現力を磨き、働く力を身に付けてもらうことを目指している。



オープン記念コンサートに向け、ハンドベルの練習をする通所者やスタッフ＝西宮市山口町名来1

作業スペースや食事もできる多目的室、70人収容できるホール、相談室などを備える。現在は1人が通所し、スペインの壁紙用コルクを使ったランチョンマットやコースター作り、折り紙の作品を制作している。

将来的には通所者自身によるコンサートの開催や運営、芸術作品の展示・販売、野菜づくりなどもしていきたいという。「A i n g」の藤原愛社長（37）は「障

害の状況にかかわらず、芸術を通じてその人らしさが出せる場所にしていきたい」と話す。

コンサートは27日午後4時～5時20分ごろまで。NPO法人「室内合奏団THE STRINGS」がクラシックや童謡を披露。通所者やスタッフもハンドベルを演奏する。無料。問い合わせは同施設TEL078・201・3728（吹田 伸）

重症心身障害者をケア 加古川に通所施設開設へ 神戸新聞 2015年9月20日
真新しい施設を見学する親子連れら＝加古川市加古川町大野



肢体不自由のある子どもらが通えるデイサービス事業所「こころ」が10月1日、兵庫県加古川市加古川町大野にオープンする。東播地域では医療面のケアが欠かせない重症心身障害者が通える施設が不足しているといい、近くの医院と連携して需要に応える。20日に内覧会があり、親子連れ約80人が詰め掛けた。

同市東神吉町で「放課後等デイサービス」など子ども向けの福祉施設を運営する一般社団法人「こころ」が開設。新施設は、小児神経疾患の専門診療を担っている近くの「あだちこども診療所」と連携することで、緊急時の医療体制を整え、重症者に対応できるという。

木造平屋約270平方メートルで、国の補助金を活用し、総事業費は約6千万円。放課後デイサービスや特別支援学校を卒業した18歳以上対象の「生活介護」があり、定員は計25人となる。

内覧会で来場者は屋内を見学したほか、地元の高齢者グループによるハーモニカの演奏を聴いたり、スタッフたちと踊ったりして楽しんだ。加古川養護学校卒業生の女性（19）＝高砂市竜山＝と訪れた母親は「こういった施設が近くに少なく、遠方に通うのも難しいので、ありがたい」と話し、上田智也理事長（39）は「医療と福祉との連携モデルを築いていきたい」と述べた。（井上太郎）

障害者と一緒に楽しむ音楽祭 23日、篠山市内7カ所 神戸新聞 2015年9月21日

障害がある人もない人も一緒にステージに立つ「兵庫・篠山とっておきの音楽祭」が23日、兵庫県篠山市北新町のたんば田園交響ホール駐車場など市内7カ所で開かれる。「みんなちがってみんないい」をテーマに、丹波地域や神戸、大阪などから60組が出演する。

(井垣和子)

2001年に仙台市で始まり、これまで大阪府枚方市など各地で開かれている。16カ所目の篠山市は、県内で初となる。福島県の仮設住宅で歌声喫茶を開く篠山の市民グループ「いのちのうた」のメンバーが、賛同者を募って実行委員会を結成した。

仙台での同音楽祭は、車いすやストレッチャーを使う多くの人が街中で音楽を楽しんだ。呼び掛け人の1人で実行委の山中信彦さん(59)は「音楽で心のバリアフリーを目指したい」と話す。

「兵庫・篠山とっておきの音楽祭」のポスターを手にする実行委員＝篠山市日置

当日は、国際障害者ピアノフェスティバル発達障害部門で金賞に輝いた末近功也さん＝神戸市西区＝がショパンの「英雄ポロネーズ」などを演奏。ダウン症で右手に欠損がある鈴木凜太郎さん＝伊丹市＝は両手でピアノを弾く。

また、障害者の通所事業所を運営するNPO法人「いぬいふくし村」(篠山市乾新町)や障害者支援施設「丹南精明園」(同市西古佐)のメンバーも出演する。

障害者が街に出て楽しんでほしいと、ほとんどの会場を屋外にした。山中さんは「誰もが住みやすい街について考えてもらえるきっかけになったらうれしい」と話している。

午前10時15分～午後5時半。無料。詳しくは同音楽祭ホームページか、向井さんTEL090・8210・3177



加藤さん、フットサル日本代表に エクアドルで知的障害者大会

秋田魁新報 2015年9月21日

知的障害者フットサル日本代表に選ばれた加藤さん



エクアドルで開かれる知的障害者スポーツ世界大会「グローバルゲームス2015」(21～27日)に、秋田市牛島の加藤隆生さん(26)＝総合型地域スポーツクラブ勤務＝がフットサル日本代表のメンバーとして出場する。日本は21日午前11時(日本時間22日午前1時)からの初戦で、フランスと対戦する予定。加藤さんは「得点に絡むパスを出してチームに貢献したい」と意気込んでいる。

大会は国際知的障害者スポーツ連盟(INAS)の主催。4年に1度の最高峰の世界大会で、フットサルに日本が出場するのは今回が初めて。予選リーグは6カ国の総当たりで行われる。

加藤さんは「もう一つのワールドカップ」と呼ばれる知的障害者サッカー世界選手権に過去3度出場し、GKやMFを務めた

加藤さんは「フットサルの世界レベルがどのくらいのものなのかを知ることができる。とても楽しみ。全力でぶつかってきたい」と声を弾ませた。

認知症ケア、探り続けた 敷島妙子さん永眠

朝日新聞 2015年9月20日

老人ホームにいた頃の敷島妙子さん＝はるみさん提供、画像の日付を加工しています



認知症がどんな病気か、患者への接し方も十分理解されていなかった40年近く前、介護体験をつづった一冊の本が大きな反響を呼んだ。その著者で「認知症の人と家族の会岐阜支部」を創設した岐阜市の敷島妙子さんが先月、93歳で亡くなった。次女のはるみさん(65)は18日、その遺志を次代につなげようと、遺産の一部を会に寄付し

た。

大垣市内で同日開かれた世界アルツハイマーデー記念講演会の終了後、はるみさんは全国組織の「家族の会」と岐阜支部代表に目録を手渡した。

話は40年前。妙子さんは、認知症の症状が現れ始めた当時77歳の義父の世話をすることになった。義父の表情は乏しく、食べて寝るだけ。失禁を繰り返した。夜中も数時間おきにトイレに連れて行くが間に合わず、汚れた服の着替えに格闘する毎日。敷島さんは義父の奇行や症状の原因を考え、接し方を変えた。

失敗しても叱らない。皆が話しかける。能力を認めてほめたり喜んだりする。体は清潔に。1カ月もすると、義父は驚くほど変わった。表情が豊かになって話をするようになり、失禁も徐々に減った。翌年、義父は別の病気で亡くなった。

妙子さんはそれから2年後、義父の介護体験を「人間であるために」（あかり書房刊）と題した本にまとめた。試行錯誤をした日々、義父の能力や感情を見つけた時の喜びをつづり、「症状を軽くするのも重くするのも、周囲の人の心の持ち方と介護のしかた次第と確信した」と書いた。介護に悩む家族や医師から反響の手紙が続々と届き、発行部数は1万部を超えた。5年後には改訂版「おじいちゃんが笑った」が出た。

さらに、1980年1月に京都市で開かれた「家族の会」の結成総会に参加。敷島さんはその年の4月に岐阜支部を結成した。代表を9年間務め、講演活動や国監修の認知症紹介パンフレットの作成など情報発信を続けた。

「家族の会」の高見国生代表理事（72）は「認知症の人の気持ちに添って世話をするという極意は、今では介護の要になっている。先見性のある優れた人でした」。同会顧問で老年科医の三宅貴夫さん（70）は「当時は認知症を専門とする医師もほとんどおらず、介護の方法もわからない時代。表面的なケアでなく、行動の原因を探って対応することの重要性を教えてくれた」と話す。

夫とはるみさんは、2003年に脳梗塞（こうそく）になった妙子さんを世話した。夫が亡くなり、はるみさんが腰を痛めたため、妙子さんは数年前に愛知県の老人ホームに入居。認知症になったが、穏やかな晩年を過ごし、先月24日に肺炎で亡くなった。はるみさんは今、こんな思いを抱く。

「母は義父の介護の時、深刻な顔をしたことがなく、『人生っておもしろいね』と私によく話していた。自分も相手も人間らしく生きるという思いが強かったのだと思う。そんな母の気持ちを寄付の形で家族の会に届け、活動に役立ててもらえればうれしい」（吉住琢二）

入所女性の首絞めた疑い 大阪、特養ホーム職員逮捕 西日本新聞 2015年09月20日



入所する女性が救急搬送された、特別養護老人ホーム「さんらく苑」を調べる大阪府警の捜査員ら＝19日午後、大阪市住吉区

大阪市住吉区の特別養護老人ホーム（特養）で入所する女性（97）の首を絞めたとして、住吉署は19日、殺人未遂の疑いで介護職員の叶涉悟容疑者（23）＝大阪府岸和田市＝を逮捕した。女性は搬送されたが命に別条はない。

府警によると、「日々の介護に疲れた。苦しみを誰かに気付いてほしかった」と容疑を認めている。

逮捕容疑は19日午後2時25分ごろ、住吉区荻田5丁目の特養「さんらく苑」の施設内で、女性の首を両手で絞めて殺害しようとした疑い。

特養側から「入所者の女性の顔色が悪く、意識がもうろうとしている」と119番があった。

敬老の日 商戦に変化 高齢者イメージ回避

大阪日日新聞 2015年9月20日

21日の「敬老の日」が近づき、百貨店などが活気づいてきている。年齢を重ねても心身ともに“若い”高齢者が増えているのを背景に、大阪市内の百貨店などでは高齢者をイメージするような手法を避けたり、機能的でオシャレな品ぞろえに力を入れている。

近年は、退職後にそれぞれの趣味や、まちづくりに参加するなど活動的な高齢者が増加。65歳以上を、ゴールデンエイジと定義したり、中にはアクティブシニアとの呼称を広めたりする取り組みもある。

オシャレをキーワードに商戦を展開するあべのハルカス近鉄本店＝大阪市阿倍野区

こうした時代の流れに合わせて、各百貨店の敬老の日商戦が変化。大阪高島屋（同市中央区）のように「3世代が一緒に店に遊びに来てもらい、楽しんでもらえるような企画を展開する」（広報担当）など、同市内でも各店が趣向を凝らした取り組みを進めている。

このうち、阪急うめだ本店（同市北区）は催事場に商品を集めるような手法ではなく、店内の各店舗がそれぞれに商品を提案する方法に変更。同店の広報は「敬老という言葉を嫌う人もおられ、敬老の日フェアとして商品を集めようと逆に敬遠される」と理由を説明する。

また「最近定番の商品はない。個人のことを考えて買い求められるお客さまが多い」といい、女性へのプレゼントは服飾品などが売れ筋で、夫婦二人には箸を贈る人が多いという。

一方で、あべのハルカス近鉄本店（同市阿倍野区）は、“オシャレ”をキーワードに展開。収納時の薄さが2ミリとスリムな老眼鏡や洋服とのコーディネートしやすいバッグなど、オシャレな大人のこだわりに応えるラインナップを用意している。

今年の商戦について同店の広報担当、板野綾香さんは「旅行やスポーツなどを楽しむ方が多いことから、今年は機能性やデザイン性を重視した」とし「敬老の日の贈答品のトレンドは、しばらくこの傾向が続くのでは」とみている。



地域のため多彩な活動 10団体に道新ボランティア奨励賞

北海道新聞 2015年9月21日

【根室】第39回道新ボランティア奨励賞の贈呈式が20日、根室市総合文化会館で行われ、障害者の支援や地域での絆づくりに携わる道内の10団体に一般奨励賞が贈られた。

北海道新聞社会福祉振興基金の南出裕常務理事は「地域のための多彩な活動が評価された」と述べ、各団体の代表に記念の盾を手渡した。助成金は各30万円。1人暮らしの高齢者を対象に傾聴ボランティアを行う根室管内中標津町の「お話し相手 笑（え）くぼの会」の田久保稔代表は「高齢化や少子化の中、互いに支え合うことがより重要になる。活動に精進したい」と、受賞団体を代表してあいさつした。

95個人10団体を地域貢献で表彰／社会福祉大会

四国新聞 2015年9月21日



観音寺市の合併10周年を記念した第10回社会福祉大会（市社会福祉協議会など主催）がこのほど、香川県観音寺市大野原町の市大野原会館であり、地域福祉や共同募金活動などに貢献した95個人・2団体・8法人に表彰状や感謝状が贈られた。

大会には福祉関係者約700人が出席。市社会福祉協議会会長を務める白川市長から、各部門ごとに代表者に賞状が手渡された。

中学生の発表もあり、観音寺中部中3年の斎藤梨緒さんと豊浜中2年の横内彩乃さんが福祉施設で体験した学習の成果を披露。「自分たちにできることから行動を起こし、明るい社会をつかっていきたい」などと締めくくった。

記念講演では、立教大教授で精神科医として活躍する香山リカさんが「心をつなげて生きるということ」と題して話し、障害者雇用を積極的に進める企業や東日本大震災後の民生委員らの奮闘ぶりを紹介した。

力強い演奏 千人魅了 障害者の「瑞宝太鼓」 大分合同新聞 2015年9月21日 瑞宝太鼓と日出生中学校生徒の共演＝大分市



スペシャルオリンピックス日本・大分（内野純一理事長）の設立20周年記念イベント「はばたけ勇気の翼コンサート2015」（大分合同新聞社後援）が20日、大分市のホルトホール大分であった。知的障害者の和太鼓集団「瑞宝太鼓」（長崎県）が力強い演奏を披露、約千人の観客を魅了した。

2010年の東京国際和太鼓コンテストで優秀賞を獲得した「ビーテッセンス」などを演奏し、玖珠町日出生中学校の生徒でつくる「日出生大自然太鼓」と共演。息の合ったステージに拍手が鳴りやまず、アンコールにも応えた。

演奏を聴いた同市の佐藤由起さん（52）は「DVDで『瑞宝太鼓』の演奏は聴いたことがあるが、生だと迫力が違う。感動しました」と話した。

大分大学生と障害のある人たちによるダンスや、細川佳代子スペシャルオリンピックス日本名誉会長と広瀬堯子（たかこ）ケア・サポーターズクラブ大分会長との対談もあった。

潮風受けカヌー、親子で連休満喫 聴覚障害児ら50人 琉球新報 2015年9月21日 心地よい潮風を受けて、カヌーを楽しむ「県聴覚障害児を持つ親の会」のメンバーら＝20日、南城市玉城の奥武島



【南城】大型連休2日目で日曜日の20日、県内各地でレジャーを楽しむ親子連れが見られた。南城市玉城の奥武島では、県聴覚障害児を持つ親の会（真栄城守信会長）の親子やボランティアら50人余がカヌーを楽しんだ。参加者らは潮風と波の揺れを体感し、思い思いにパドルをこいで休日を満喫した。

初めてカヌー体験をした難聴の棚原碧唯（あおい）ちゃん（5）＝浦添市＝は、最初は「（カヌーが）ひっくり返ったらどうしたらいいの」とびくびくしていたが、母親の貴枝さん（34）と海にこぎ出すと気持ち良さそうに楽しんでいた。「怖くなかった。もう1回乗りたい」と話し再度挑戦していた。



障害者とアーティストコラボ アート作品制作進む

日本海新聞 2015年9月21日
色鮮やかに塗る（左から）岡本さん、Claraさん、岡村さん。3人は「展示されている自分たちの作品を見たい」と完成へ向けてやる気十分＝20日、鳥取市戎町の市商業福祉センター

鳥取県内在住のアーティストと障害者が共同でアート作品を制作する取り組みが鳥取市内で進んでいる。イラストレーターClaraさんと、NPO法人「ひつじの会」の事業所（同市戎町）に通う岡村真由美さん（2

5)、岡本智絵子さん(25)の3人。20日は下書きしたイラストに次々と色を塗り重ね、完成へ一歩近づいた。障害者の芸術作品展「あいサポート・アートとっとり展」が12月以降、県内3会場を巡回。

26日に「なんばおにごっこ」 バリアフリーを体感 参加者募集



昨年開かれた「なんばおにごっこ」 産経新聞 2015年9月21日
障害者らに街歩きの楽しさを知ってもらい、健常者にも大阪・ミナミのバリアフリー状況を体感してもらおうと、府内の障害者団体でつくる実行委員会は、26日にまち歩きイベント「なんばおにごっこ」を開く。

難波界(かい)隈(わい)の商店街で、大阪や難波に関する歴史や文化などについてのクイズに挑戦。ポイントに応じてたこ焼きや大阪土産を贈られる。また、参加者全員に、難波エリアにある車いす用トイレ約50カ所が載った地図がプレゼントされる。

担当者は「障害の有無にかかわらず参加できるので、気軽に街歩きを楽しんで」と話している。参加料は大学生以上500円、小中高生200円。4～6人のグループで申し込む。当日参加も可能。小雨決行。申し込み・問い合わせは、おにごっこ実行委員会事務局((電)06・6779・8126)。

<金口木舌>障がい者差別解消法

琉球新報 2015年9月22日

昼時で混み合う中華料理店での話。車いすで入店しようとした客に店員が言う。「混んでいるから午後2時以降に来て」。差別ではないかとの苦情に店員が言い返す。「午後2時以降なら入店できるから差別じゃない」▼県外での話だが、それぞれが考える差別の認識に差がある。店員は混雑を理由に配慮したつもりだろうが、その時間でのサービスを拒否している▼障がいを理由にした直接差別は減ってはいる。だがいかにも中立的基準、規則、慣行を装う、こうした間接差別が今もある▼宜野湾市内で開かれた障がい者差別に関する研修会で内閣府障害者政策委員の佐藤聡さんが言った。「差別かどうかを測る共通の物差しがない」。全国で認識に差のある間接差別が報告されているという▼ハードな行程を理由に修学旅行への辞退を促された身体に障がいのある生徒。「犬の立ち入り禁止」との規則を盾に盲導犬との入店を拒否された全盲者。精神的発作を起こし解雇された人。そんな幾多の悔しさと悲しみを積み重ねて障害者差別解消法が来年4月施行される▼間接、関連差別が明記されず、あらが目立つ法律との声も施行前からある。それでも障がい者団体にとっては改善への足掛かりになるという。差別を測る物差しづくりは社会全体の共同作業である。目盛りは細かく鮮明に。差別解消への道筋を描きたい。

光で脳神経回路操作する技術開発 うつ病などの治療に応用期待

共同通信 2015年9月21日

神経が複雑に絡み合った霊長類の脳で、光を当てて特定の神経回路だけを高い精度で操作する技術を開発したと、京都大と筑波大のチームが21日付の英科学誌電子版に発表した。人やサルは1千億以上の神経細胞がまとまって回路を作り、記憶や判断力、行動・感情のコントロールなど高次の脳機能を生み出している。

チームの井上謙一・京大霊長類研究所助教は「高次脳機能の解明やパーキンソン病、うつ病の効果的な治療法開発に応用が期待できる」と話す。チームによると、精神・神経疾患の解明や治療には、複雑な神経回路の中から特定の回路を狙い、その機能を操作する技術が必要とされる。

介護事業者の倒産最多に 今年1～8月、報酬減など響く 共同通信 2015年9月20日

介護サービス事業者の倒産件数（負債額1千万円以上）が、今年1～8月の8カ月で前年1年間を上回る55件に達したことが、20日までに信用調査会社の東京商工リサーチの調べで分かった。2000年の介護保険制度開始から、年間倒産件数の最多記録となった。事業者を支払われる介護報酬が4月に2・27%引き下げられたことや、景気回復で他業種に人材が流れたことによる人手不足が主な要因。高齢者が利用先の施設を変えなければならなくなったといった影響が出ている。

社説：特殊詐欺／社会全体で被害を防ぎたい 河北新報 2015年09月22日

電話で虚偽の話をもちかけ現金をだまし取る「特殊詐欺」の被害が、依然深刻だ。

警察庁は、ことし上半期の特殊詐欺による被害総額が約236億5千万円だったと発表した。被害額こそ前年同期に比べて約33億円減少したが、認知件数自体は850件も増えている。被害者の8割近くが65歳以上の高齢者であり、一刻も早く現状に歯止めをかける必要がある。

2015年版警察白書は特殊詐欺を「新たな脅威」と位置付けた。昨年1年間に摘発された特殊詐欺容疑者の約35%が暴力団の構成員だったためだ。多額の被害金が反社会的組織の活動資金に回っている実態は、特殊詐欺を被害者の自己責任と突き放して済む問題ではないことを物語っている。

特殊詐欺グループは主に首都圏に拠点を構え、電話かけや現金の引き出し、名簿集めやグループ内の研修担当など役割を細分化し、マニュアルに従って連携する。繰り返し注意が呼び掛けられながら被害が後を絶たないのは、それだけ手口が巧妙なためだ。

東北では宮城と福島、岩手の3県で被害総額の8割を占めた。金融機関や宅配業者らによる水際対策を警戒する詐欺グループが、現金を振り込ませたり送らせたりせずに直接被害者から受け取るため、アクセスが容易な東北新幹線沿線の3県を狙ったと考えられる。

警察の摘発も増えてはいるが、そのほとんどが集金役など末端の構成員だ。組織や犯罪の全容を知らない末端を捕まえても上層部にはたどり着けず、組織は貧困層や累犯者を新たな集金役に雇って暗躍し続ける。グループを壊滅させるためには、わずか3%にとどまる主犯格の摘発が欠かせない。

警察庁はことし4月から、「匿名ダイヤル」の対象に特殊詐欺を追加し、捜査に役立つ情報には情報料を払うことにした。組織性が疑われる詐欺事件の捜査にも電話やメールの傍受を可能にする改正法案も今国会に提出。詐欺グループの本丸に迫る捜査の前進が期待される。被害に遭わないための自衛の大切さもあらためて確認したい。まずは犯人からの電話を断つことだ。詐欺や悪徳商法に使用された電話番号からの着信をランプで警告する電話会社のサービスや電話機も開発されている。警告機能と録音機能を備えた電話用の機器を無料で貸し出す自治体も増えてきた。詐欺被害に遭った高齢者の多くが、「自分はだまされなかった」と話す。家族の責任として、こうしたサービスの活用を強く促すなど、これまで以上に一歩踏み込んだ対応が必要ではないか。

身寄りのない独り暮らしの高齢者は、詐欺グループの標的になりやすい。相談に乗れる人が周囲にいれば未然に防げた、そう思える詐欺の被害例が少なくない。地域や自治体による声掛けや見守りが一層重要になる。組織ぐるみの詐欺ビジネスに泣き寝入りする高齢者を増やしてはならない。そのためにも、社会全体のセーフティネットを広げたい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

